鮫中

生徒の言語能力を高め、学びに向かう力を育成する指導の研究

～互いの考えを深め合う活動を中心として～

（３年計画の３年次）

校長　　富樫　克輝

１　研究主題について

本校生徒は、「生活をよりよく向上させる意識」、「学ぶ意欲」、「コミュニケーション能力」の低さが課題である。そこで生徒が生活を見直し、学習意欲を高めることができるように、「課題の提出」・「１分前着席」・「授業道具の準備」から成る「学習三原則」を定めており、日頃から教師が声を掛けたり、生徒会や学年プログラム委員会などと連携して達成状況を調べたりしながら、生徒に対し意識づけを図ってきた。また、コミュニケーションの活性化を目指して、各種調査や面談を通じて良好な人間関係づくりに努めるとともに、授業ではグループ活動や対話活動を重点的に取り入れることで、発言しやすい雰囲気づくりを心掛けてきた。特に年間６回の「学級話合い活動」では、自分の意見を表現しようとする生徒が増えてきている。

一方で、特に教科の授業においては自分の考えに自信がもてないことや、考えを伝えるための言語能力が乏しいことから、なかなか意見を表現できない生徒がみられる。さらには基礎・基本の定着が不十分であることから、意見をもつことができない生徒も少なくない。これらの点を改善し、主体的に学ぶ姿勢を育むことが急務である。

そこで、令和３年度から３年計画で「自分の考えをもつ」、「自分から表現する」、「互いに深め合う」と段階を設けながら、学びに向かう力を育成する指導の研究を進めることとした。昨年度は考えを表現する場面の設定などの取組を通じて、生徒が授業の中で自分の意見を表現しようとする意識が以前に比べてみられるようになった。

今年度は昨年度までの取組に加え、考えを深め合う場面を多く設定することで、生徒全員が互いの考えを尊重し、主体的に学びに向かうことを目指して、実践を行っていきたい。

２　研究のねらい

生徒に基礎・基本を定着させるとともに、言語能力の向上を図り、生徒自身の「学びに向かう力」を育成する指導法の確立を目指す。

３　研究仮説

授業における導入場面や学習形態の工夫、授業と家庭学習との連携を図る取組を通じて、生徒に基礎・基本を定着させることや、授業などで考えを深め合う場を取り入れながら、生徒の言語能力の向上を図ることで、生徒が自信をもって発言したり考えを深め合ったりできるようになり、ひいては主体的に学習に臨むようになるのではないか。

４　研究内容

(1) 基礎・基本の定着や考えを深め合う場面の設定など、教科の特質に応じた授業改善の推進
(2) 家庭学習の充実につながる「学び方」指導
(3) 特別支援教育の視点や、ＩＣＴの効果的な活用などを土台にした学ぶ環境づくり
(4) 自主的な態度を育てる学級・学年経営の推進

５　研究の経過

(1)研究仮説に基づく授業研究

月	日	内　　容
９	１３	授業参観月間開始　（対象者：全員）
１０	４	授業参観月間終了
１１	１３	指導課・センター訪問

(2)一般研修

月	日	内　　容
１	１７	拡大校内研 「特別な支援を要する生徒に対する、学級における配慮のあり方について」 講師：八戸学院短期大学部　幼児保育学科　教授　野口和也氏 〈概要〉 ・ 14:20～15:10　5 校時　授業参観（７学級） 気になる生徒の様子と教師の対応についての参観 ①１－１→②知的→③２－２→④２－１→⑤自・情→⑥３－１→⑦３－２ ・15:25～16:25　それぞれのクラスについて助言 生徒の様子、教師の関わり、質疑応答 ・16:25　謝辞（校長）

６　研究の成果

授業参観週間を設定し、教員同士でお互いの授業を参観し合った。その際に、授業参観シートと称して「導入の工夫」「互いの考えを深め合う活動のための学習形態の工夫」「特別支援教育の視点を取り入れた授業づくりについて」の３点について、授業者に記入してもらった。参観者には、参観後にその観点について感想を記入してもらい、授業者へのフィードバックを図った。感想として、「教材の提示の工夫や、言葉掛けの仕方などを改めて考え直すきっかけになった」や、「他教科の授業を参観することで、自分の授業とは違う生徒の様子を見ることができ、刺激になった。」などといったものがあった。また、課題の提示の仕方を動画で行うなど導入の仕方にヒントを得た職員もいた。これらのことから、授業を見直すきっかけとなり、授業改善や授業力向上に役立ったのではないかと考える。

７　研究の課題

研究主題が３年目であり、これまで段階的に行ってきたことが十分に浸透しているかといえば、そうではない部分もある。来年度の研究主題についてのアンケートによると、半数以上が主題を継続したいという考えであった。生徒に付けたい力としては、「基礎・基本の学力」「自主的な態度」といったものを望む声が多かった。これらの点については、生徒の実態と、求められる生徒像とをすり合わせながら来年度開始までに、吟味して決めていきたい。また、出張・校務の都合もあるが授業参観やアンケートの 100%参加に至っていないことも含め、職員の参画意識を高めていくことも課題である。

（記入者　戸田　香）